第二十八回合宿教室　第三日　（八月八日ー月ー）　御講義資料。（雲仙・有明ホテルにて）

「短歌創作導入講義」資料

福岡教育大学教授
国民文化研究会常務理事　山田輝彦

一、新聞歌壇近詠抄

(1) あじさいの色濃くなりし今朝の庭吾がのぞみ今も小さく燃ゆる
(2) 猫の子が親を慕いて鳴きゆくを巣籠もる鳩は軒端より見る
(3) 「父の日」の無き時代重き存在感「父の日」ありて父のなき今
(4) 水槍のいまだ芽吹かぬ林より澄み透りくる鶯の声
(5) 親子蜘蛛かけし糸の輪切らぬよう背をかがめつつくぐり抜ける子
(6) 黙々と群なしのぼる階段のホームの雑踏寄り合う孤独
(7) さかさまにうつる山の秀数みえて秀数みえて田植機ひびく伊那のはざま田
(8) 子を捨てて国境越えし夢を見ぬ孤児思いつつ風邪に臥す夜を
(9) 皿に盛るホットケーキの動物の来る子来ぬまま凋あるる夕べ
(10) 晩霜のきざしに覚めて鳥かごに布かけをれば一羽が鳴けり

二、手術のあと（広瀬　誠・歌集『坂の沼琴』より）

(1) いたはりの妻の言葉を夢うつつ麻酔さめゆくベットに聞けり
(2) 八時間の手術のあとの意識もどりなほうつろにぞ物の音を聞く
(3) 妻妹弟義兄ら顔寄せて長き手術を憂ひ居しといふ
(4) 輸血点滴管の数々まとひつき蜘蛛の巣なす中に寝かされてあり
(5) 尿の管食物の管管の間にかすか息づくわがいのちかも
(6) 動きなばいのち切れむと夜もすがら苦しきに耐へわれは動かず
(7) 昏々と眠りては又強く目ざめ眠らえぬ病室の夜はも更けゆく
(8) せはしなく痰つまりくれば痰取り機おそるおそるも妻は手にせり
(9) 事しあらば火にも水にも入りなむと妻は夜すがらわれを看とれり
(10) わが背子は物な思ほしと万葉の歌唱へつつ妻は祈るも

（註）わが背子は物な思ほし事しあらば火にも水にもわれ無けなくに（万葉集）